

(2) 指導者

・ 滝沢市特産岩魚振興会角掛養魚	代表	角掛 徹 氏
・ 国立岩手山青少年交流の家	副主任企画指導専門職	佐々木真里子
・ 国立岩手山青少年交流の家	企画指導専門職	中村 聡
・ 国立岩手山青少年交流の家	企画指導専門職	工藤 祐幸
・ 国立岩手山青少年交流の家	事業推進係主任	藤根 智子
・ 国立岩手山青少年交流の家	事業推進係	佐々木 翔也

(3) 企画のポイント

虐待を受けた子供が、大人への信頼を回復し一歩前に踏み出せるように、ゆとりある日程の中で大人1名に子供が1～2名程度にして、大人との関わりをとれるようなスタッフの配置をした。今回のキャンプでは、交流の家を拠点とし周辺の恵まれた立地条件や自然環境を生かすことができるように、「アドベンチャー」をテーマにイワナつかみ探検、秘密基地づくり、流水プールにおける水泳やウォータースライダー体験、缶バッチ作り体験などのチャレンジを通して自己肯定感を高める活動と、野外炊事やソフトボールなどの交流を通して社会性を養う活動を取り入れてプログラムを構成した。また、年間を通して各施設の登山や収穫祭、学園祭、スキー教室等の行事のサポートを行い、子供たちとの関わりをもてるよう配慮している。

(4) 広報のポイント

参加対象者を4つの施設に入所している児童・生徒と限定したことから、公募の形ではなく各施設で参加者を4人以内で確定してもらった。参加者は様々な家庭事情を抱えているため報道機関への案内はあえて行わなかった。

(5) 運営のポイント

参加する児童・生徒にタートルズキャンプへの理解を深めてもらうために、事業開始前に4つの施設を訪問し、交流の家職員から参加者に対する対応事例の説明と参加者同士の顔合わせ会を行った。顔合わせ会では、昨年度のキャンプの様子を紹介しながら、今年のキャンプの活動内容について説明することでキャンプへの意欲付けをするとともに、参加する職員を紹介しながら交流を図った。また、職員間で参加者への対応の仕方について共通理解を深めるために、事業期間中、参加者就寝後に一人一人の「振り返りシート」を基にスタッフミーティングを行い、参加者の行動の変化や担当する班の様子について情報交換を行った。

7 成果とその普及

プログラムごとのつながりに配慮した事業運営と意図的・計画的なプログラム運営やグループ編制により、活動を重ねるごとに参加した児童・生徒が関わりを深め、進んでコミュニケーションを取り合う姿が見られた。特に、最終日の夏祭りパーティー（野外炊事）では、他施設の子供も入った男女混合のグループだったにも関わらず、年長者が自然に中心となってグループの活動をリードするとともに、相談しながら協力して活動する場面が多々見られた。このことは、2日目のスタッフミーティングにおいて、児童指導員の各参加者に身に付けてもらいたい力と配慮点をスタッフ全員で共通理解し、最終日の野外炊事の運営の仕方について十分打ち合せを行ったことで、参加者一人一人が活動を楽しみながら自己肯定感を高める活動につながったものと考えられる。参加者からは「たくさんの人と協力すると必ず成果が出るというのに気付いた。これからもみんなと協力してがんばっていきたいです。」という感想も聞かれ、子供たちに自分に対しての自信をもたせる一助となった。

今年度も、子供たちのキャンプ中の変容を把握するために、参加者の感情を読み取るため「じぶんバロメーター」で自分のその日の感情を数値化し前日と比較した。「つながりマップ」では、自分の身近にいた人を記入させることでコミュニケーションの広がりを把握することができた。これらを基にして、次の日の活動の際の留意点を交流の家職員と児童指導員とで共通理解を図ることで有効な支援につなげることができた。

今回の成果を県立の青少年教育施設等に紹介し普及を図るとともに、このような子供たちを社会全体で支え支援していくという考えの下、当施設としても事業の内容を充実させていきたい。

8 今後の課題

キャンプに参加した児童・生徒一人一人の一日の振り返りを基にして、施設の児童指導員と交流の家職員が連携を密にししながら、児童・生徒の変容に合わせて弾力的にプログラム運営を図ることができた。来年度の活動内容については、各施設の児童指導員との連携を図りながら、参加者のニーズと設定したねらいがずれないように雨天時を含めた効果的なプログラム構成を図るとともに、子供たちのコミュニケーション能力の向上と自己肯定感を高めるための活動をさらに一歩踏み込んで考えていきたい。



「イワナつかみ体験～自然を満喫しよう～」



「野外炊事～みんなで楽しい昼食を作ろう～」